

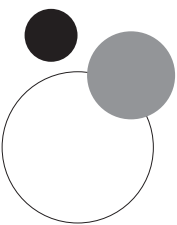


て九州に上陸したらしく、彼らの手によって稲の栽培は日本にもたらされたそうだが・・という記述があります。この苗族の子孫は今でも中国の西南部の諸州—上記大陸部東南アジアの奥地やベトナム、ラオス辺に沢山住んでいます。古代日本にやって来て住みついた頃は当時の先進技術だった南方型水耕稲作法を伝えたとされています。元来、米食民族だったとの事で日本人にコメを食べる習慣を植えたのも彼らかも知れません。また鶏を食べたい時、一羽ずつ捕まえるより何羽か囲って置くほうが便利よ、と教えたのも彼らではとされています。

その鶏ですが、日本の家鶏の祖先は大昔、やはり大陸部東南アジアの奥地—インドシナ半島の付け根辺の山地に生殖していた「赤色野鶏」という鳥だそうです。これは生物学者秋篠宮殿下が鶏のミトコンドリアDNAの分析を繰り返して遡っていった元祖をつきとめる遺伝学的手法で特定されたとの事です。秋篠宮は更に大昔の野鶏がどうして「家禽」化され、そして遠い日本の家鶏にもなって来たのかとかかわりを研究する民族生物学の視点からの研究も行いました。この為1999年に数人の研究仲間と、ベトナム径由で赤色野鶏の原産地—インドシナ半島奥地、中国領の村々まで入って調査され、その成果を手分けして執筆し『鶏と人』という本にまとめて発表されています。

面白いことに「野鶏」が家禽化され「家鶏」になったのは、各戸で囲っておいて卵も産ませ随時捕まえて食べられるようにしたのが始まりだろうと先ずは思いますが、もう一つの由来は鶏の闘争心の強さに気づいた人間が「闘鶏」の面白さにとりつかれ、やがて互いの持ち鶏の勝敗で賭博もするようになり、こうなる三度の飯より好きな闘鶏の為に隣のより少しでも強い鶏に育てようと手塩にかけ飼育するようになったのが、そもそも理由でないかという説も「鶏と人」の中の「家禽化と闘鶏」という一章で紹介されています。私たちの郷里でも特に徳之島は強い闘牛の育成で全国的に知られています。が、闘鶏も伝統的な慰み(娯楽)として昔は島中で盛んに行われていましたね。これは現在の東南アジア・インドシナ諸国とも全く同じ風景です。

昇曙夢先生と秋篠宮の二冊の本で、私達は「鶏の来た道」は大陸部東南アジアの何処から九州まで連なっていた事が分かります。その道は同時に人間が鶏を抱えて連れてきた道—即ち「人が来た道」でもあったわけですね。その人たちは命の稲の籾も携えていたでしょう。この鶏と人の来た道の始まりは何処か?の特定はまだまだ学術的な研究を要するでしょうが、ずっと九州まで続いていた一筋の、その海上の道は上述の通り私たちの生まれた島々伝いの道だったことは間違いないと思います。



明けましておめでとうございます。
旧年中はいろいろお世話になりオボラダレン
今年もどうぞ宜しくお願いします。

NPO法人徳之島「夢」振興会議 理事
(企画・コンサルタント業務担当)

久澤克己

(徳之島町母間出身)

〒240-0031 横浜市保土ヶ谷区藤塚町12-1-N301

TEL/FAX 045-352-5950

E-Mail hisazawawa@yahoo.co.jp

フジモトグループ

竹山会計事務所

公認会計士 税理士

所長 **竹山哲夫**
副所長 **藤本勝博**

事務所 〒206-0812
稲城市矢野口29-11
TEL 042-378-3669
FAX 042-378-5114

企業・個人会計処理業務
給与計算業務・経営相談

株式会社 アイケーオー

代表取締役
藤本勝博
取締役
成田幸子(長女)

〒206-0812 稲城市矢野口29-11
TEL 042-378-3921
FAX 042-378-5114

日本生命保険相互会社・代理店
ニッセイ同和損害保険株式会社代理店
株式会社 **フジモト**

代表取締役
藤本みはる(損害保険)
代表取締役
藤本勝博(生命保険)

〒206-0812
稲城市矢野口1032-8
TEL 042-378-3611
FAX 042-378-5114

冷暖房設備・給排水衛生・空調調和工事
各設備施工・各保守サービス・電気

東菱工業株式会社

代表取締役
経営管理者
藤本勝博
取締役専任技術者
藤本修磨

本店 世田谷区上馬1-10-17
TEL 03-3424-5321(代表)
FAX 03-3424-5349